

論議（諸）領域（群）から社会的（諸）世界（群）へ、 そして公共圏論の再定位

— ドイツ観念論に由来するG・H・ミードの普遍志向から
H・ブルーマーのシンボリック・インターラクショニズムへの架け橋

From Universes of Discourse to Social Worlds, and the Relocation of Public Spheres
: The Bridge between G.H. Mead's Universalism Inspired by German Idealism and
H. Blumer's Symbolic Interactionist Sociology

鎌田大資

Daisuke KAMADA

序

ジョージ・H・ミードはシカゴ大学で19世紀末から20世紀初頭に教鞭をとった。プラグマティスト哲学者として社会学、政治哲学に大きな影響を与え、近年では各種のニューロンの研究に取りくむ神経生理学（Franks 2010）や、動物と人間の関係を考える諸分野（Brewster & Puddephatt 2016）でも注目を集め、まるで埋蔵金のように掘りかえしが進むだろう知的遺産を、テキスト群に書きしるし、語りのこして世を去った。とはいえ、その遺産の多くは未公開の遺稿の束に隠れて世に知られていない。彼は、生前、学術雑誌に発表された諸論考や社会福祉系の報告書、新聞記事などを通じ思考の軌跡を部分的に公開していたが、没後は、かつての教え子だった哲学者たちの手で遺稿集が編集され、講義録を含めたかなりの量のテキストが集成されて、近年でもその出版が継続している（Mead 2001, [2008] 2016）。

その思想は、ミード没後、講義「上級社会心理学」の担当を引きついだハーバート・ブ

ルーマーにより、主に生活史分析やフィールドワークを通じて研究を進める質的社会学の一流派として、symbolic interactionism（以下、SIと略す）と命名された研究動向の哲学的基底と見なされた。ミードの未公開テキストの多くは、実は、期末レポートとして学生たちが作成した講義内容の要旨、要約であり、そのうちには、学生が雇用した速記者による逐語的な速記類も含まれている。各大学のアーカイブ資料として散在し公開されているそのoeuvreは、特に地理的に遠く離れた日本の研究者にとって、いまだにその全貌に接近しきれないものとなっている。

ブルーマーがSIを提唱し、その実践となる各種の研究を擁護していた時代は、実は没後に編纂されたミードの著作集の编者らが各種のテキストを管理し、共有化が進まない段階であった。群盲象をなでるといった類の手さぐりの考察の状況で、シカゴ大学の口承伝統（oral tradition）と呼ばれるテキスト外の評価や憧憬の念が積もりつもった一種の神話化も作用し、公刊テキスト、ミードの神話的イ

メージ、そして将来、テキスト全体を見わたし把握されるかもしれないその実像という三者の距離を測りかね、それでも何とかして仮想された実像の方へと近づきたいといった思いに突きうごかされる研究者心理も働いたことだろう。

本論ではブルーマーが最晩年に、ミード遺稿集の編集者の一人だったデヴィッド・ミラーと交わした往復書簡から、ミードの知的遺産として、SIの流れを汲む社会学や、社会心理学の共有財産となった二つの概念である論議領域 (universe of discourse)¹⁾ と、一般化された他者 (generalized other) についての考察を取り上げ、その後のSIにおいて多様なエスノグラファーを輩出した社会調査史、研究史とのかかわりを再考し、さらに学説史を超えて、現代社会の政治状況にもかかわるプラグマティズムに由来する熟慮の政治や、その根拠となったミードによる社会性 (sociality) の考え方の含意も、それと関連づけられる範囲で考察する。

従来のミード研究は、『精神・自我・社会』(Mind, Self, and Society. Mead [1934] 2015 = 2018. 以下、MSSと略す) に書きこまれたIとmeの関係や、プレイ段階、ゲーム段階という子どもの発達段階とそこでの役割取得、そして、ゲーム段階での一般化された他者の役割取得などの理論の形成と展開を、それ以前の公刊論文から位置づけ、詳しく検討するものが中心であった。論者はミードの専門家ではなく初期シカゴ学派社会学やSIのモノグラフやエスノグラフィに親しみ、ハワード・ベッカーのレイベリング理論、芸術(諸)世界(群)論、分析的帰納法、グレイザーとストラウスのグラウンディッド・セオリー、ノーマン・デンジンのエピファニー概念などを使

いながら、質的な実証研究にも取りくんできた。

ミード理論そのものを枠組として使った実証研究はめずらしく、ミードをSIの代表的理論家と見なし、各種のエスノグラフィの蓄積は認知せず、あるいはミードとは無関係と考えて、「SIは実証研究に使えるのですか」などという疑問もぶつけられることになるのだろう。とはいえ、SIは多数の学術誌で多様なアプローチから執筆され続ける量的、質的な実証研究の集積そのものであり、ミードについての理論研究は重要なサブジャンルではあるものの、具体的社会現象をめぐる実証研究とは別個に追究されていると思われる。

本論ではミードの論議領域概念とSIの複雑な関係を解明し、現実のエスノグラフィなどの経験研究で用いられうる社会的世界論の枠組を論議領域に代わるものとして跡づけ、さらに理論的にSIの社会的世界論と接合して用いると、論者がかつて論じたハーバースに由来する公共圏の考え方(鎌田2014)と、現実の社会現象をSIの立場から経験調査する場合に考えるべき問題も検討する。

1. ミードとブルーマーの関係について

ブルーマーとミラーの書簡テキストの考察のまえに、本論に至るまでの論者のミードに関する思考の流れを必要な範囲で振りかえり、さもなければ唐突とも思われるかもしれない論旨の必然性の理解の一助としていただきたい。

ミードの「社会心理学」は、主に社会学の概説部分で講じられる「子どもの社会化」研究の、初期の理論的成果として論じられてきた。その理論の骨子は晩年の講義録をもとに編纂されたMSSで整理されている。MSSの議論とヘーゲルの『精神現象学』を対比することで、論者は以下のように考えるようになった。

1) 旧訳語としては話想宇宙、意味世界、論議の世界などがある。

た。ミードの児童発達の議論はヘーゲルによる「精神」の弁証法的な成長過程をなぞるものであり、またヘーゲルの絶対精神に代えて、ミードは一般化された他者を提示して、ヘーゲルの自民族中心主義や、（特に彼が育てられたルター派神学の範囲での）キリスト教を人類の最高の達成と見なす人類社会発展の社会進化説を回避し、さらにヘーゲルの『法の哲学』には決して言及しないことで、その抑圧的な国家観を排除した「社会観」「人間観」を提示するに至った（鎌田 2021；Luther 1520=2011）²⁾。

そしてミードの思考の精華として最晩年に構想していた『現在の哲学』（Mead 1932=2001）があるとすれば、そこで展開されている行為者同士のパースペクティブの融合による社会性の達成は、彼の社会倫理や社会哲学を構想する基盤となるものであろう。けれども、そのまえにカリフォルニア大学バークリー校でなされたアイルランドの懐疑主義の哲学者、バークリーについての考察を和訳しつつ、そこで表明されたアインシュタインの相対性理論への言及から、万人共通の普遍的で絶対的な時空間を否定し、光速に比した運動体の速度に応じて、伸びちぢみする時空間の多様な座標系が併存する多元的な宇宙観が、ミードの思考を鍛えなおす鉄床となっていることを論者は再確認した（Einstein 1905=

2015; Mead 1929=2021）。

そうした経緯から、以前、ミードの公刊された全テキストを論者が通読しようとした際の発想に立ちもどると、ミード自身が執筆したテキストやMead Papersなどとして残された学生たちの手になる講義録に、彼の葛藤が読みとれるように思われ、特にuniverse of discourse（論議領域）やgeneralized other（一般化された他者）の扱いにそれが顕著であるように思われた。「意味世界」とも訳される「論議領域」は、「一般化された他者」自体がさらに抽象化されて、討議、論議の言及対象となる世界の広がりを目指すものだろうから、両概念は表裏一体のものとして論者は考えている。

（学生の期末レポートに要約された）ミード自身の言葉では、以下のように論議領域が複数形で語られることがある³⁾。他方、社会学者が調査対象とするのは現実社会で実際に観察できる複数の論議領域の併存状況やその重なりだと思われる。しかし、ミード自身が語っていたのは、そうした論議領域の併存状況で生じる事柄ではなく、そこからさらに包括的な論議領域が討議（discourse, discussion）を通じて錬成され、普遍的な論議領域の形成に向かう価値観の力学である。

There are, of course, different universes of discourse, but back of all, to the extent that they are potentially comprehensible to each other, lies the logicians' universe of discourse with a set of constants and propositional functions, and anyone using

2) ヘーゲルとミードの対比および参照文献も前稿を参照いただきたい。世代に近いヘーゲル、フィヒテ、シェリング、そしてかれらにやや先行するカントは全員がルター派の神学教育を受けて世に出た人々であり、その特異な「自由」「人権」等に関する思考は、「キリスト者の自由」に関するルター派神学によって形成された。その「自由」観は、フランス革命やナポレオン憲法で制度化されるかに見えた「人権」思想の消長を横目に睨みながら、かなりの振れ幅で動揺した。そしてかれらを通じてアメリカの社会学者も、社会コントロールに関する議論にルター派の「キリスト者の自由」の思想を導入してきた。本論では詳述できないが、論者はこう考える。

3) 論者は前稿でMSSにおいて論議領域は複数形では登場しないと考え、不定冠詞がつく用例から文法的には複数形もありうると書いたが、これは本文で見た用例を失念した単純な誤りであった（鎌田 2022：47, n.24）。本論では、MSSからの引用箇所はHuebnerの校訂版で付された章-節番号により示す。

them will belong to that same universe of discourse. (34-12)

ここで「論理学者たちの論議領域」(logicians' universe of discourse)と述べているのは、おそらくは実際にその術語を用いて最初にテキストを構成した数学者ジョージ・ブールの概念であり、論議領域は極論すれば宇宙そのものと等しい広がりをもちうると、ブール自身は述べているので、ミードも個別の論議(諸)領域(群)⁴⁾とすべて包含する普遍的、一般的、絶対的な論議領域の存在を仮定して言及しているものと考えられる⁵⁾。ミードの概念化した論議領域は複数形で語られうるとしても、ミード自身は常にそうしたものが一つの普遍的論議領域に収斂し精練されていくことをイメージしていたようである。複数形として語られた論議領域は、その後

の社会的な経験調査のなかでは複数併存する社会的(諸)世界(群)と読みかえられて研究されてきたと思われる。それは多くの未公刊の草稿群を残したまま、ミードの遺稿集の編集が中断してしまった結果、シカゴ大学でミードに接していた多くの社会学者たちが、自分たちの知る限りの(つまりは現実に彼と会話する状況で脳内に蓄積された)ミード像を頼りに学問に取り組み、草稿群の本格的な総合的検討から浮かび上がってくる可能性があるミード像と、自分の脳内のミード像の距離を測りかねる状況で見切り発車的にミードを語り、それぞれの実証研究を進めていかねばならなかったことを意味する。したがってミードを語る研究者それぞれの複数のミード像が形成されうるし、今後、草稿群の検討が進み掘み出されるミード像は、新たな研究者が、これまでとは違うルートで把握する新規のミード像となるはずである。

またブルーマー、ミラーとミードの関係について整理しておく。

ミードは担当講義である社会心理学を受講生の増加などを考慮して生前に初級と上級に分け、初級の講義は牧師でもある同僚の社会学者エルスワース・フェアリスにゆだねた。そして、自身で担当をつづけた上級社会心理学は、健康が衰えた最晩年にブルーマーに委ね、初級、上級ともども社会学者の担当科目として譲渡した。ブルーマーはミードの後継者を自認し、SIを後世に位置づける際にも、フェアリス、ウィリアム・トマス、ロバート・パークら社会学者と同様、ミードにも言及し、そのことで、哲学者ミードの没後公刊されつづけていく著作を、事実上、SIの発想源たりうる書物として指定した(Blumer 1937)。しかしミードのテキストでは上記の一般化された他者や論議領域概念について普遍性を志向する考察が加えられ、観察可能で経験調査

4) universes of discourseという複数形を和訳する場合の便法として、論議諸領域、論議領域群などとする表記が考えられるが、複数形を表示できない日本語の特徴は承知の上で、本論では逆に原語の複数形を強調する表現として論議(諸)領域、論議領域(群)、そしてその両者の組み合わせをも用いる。この表記の背後にある事情は、複数形で用いられるのが常態となっているsocial worldsを社会的(諸)世界、社会的世界(群)、art worldsを芸術(諸)世界、芸術世界(群)などと訳す強制的な表記とも共通である。

5) 念のため、ブールによる論議領域の提示箇所を引用する。

自分自身の思考と会話する精神についてであろうと、他者と対話する個人についてであろうと、あらゆる論議においてその内側にだけ、その働きの主題が限定されるように想定、表明された限界がある。もっとも妨げのない論議は、わたしたちが用いる言葉が、そのもっとも広い可能な適用範囲で理解されるようなものであり、そうしたものにおいて論議の限界には、宇宙(universe)そのものと同じ広がりがある。しかしもっと普通には、わたしたちは自分をそれほど広くもない領域に閉じている。[中略]さて、わたしたちの論議のすべての対象がそのなかにある領域の範囲が何であれ、その領域を論議領域(universe of discourse)という(Boole [1854] 1958 : 42; 鎌田 2022 : 42. 下線は引用者による強調)。

の対象となる社会現象において、複数が並立して多様な価値観の体系が衝突する社会的世界群をそれぞれ個別に取りだして記述、分析、検討する社会学的経験調査と、その着想が一致しうるものかどうかを確定できなかった。ミードの未完草稿群の存在が知られてはいながらも、自由に研究できるインフラが整備されていなかったことから、たとえばMSSのような著作に編集者モリスの独断的な判断が盛りこまれて、文意が改変されているのではないかといった編集問題、著作としての真正性をめぐる疑いも加味されて、結果としてその問題を取りかこむ霧が深まり、手を付けられない点は棚上げにして、目前の問題のみに集中する研究態度が常態化していったと思われる⁶⁾。

6) ブルーマーとSIの関係について、本論の要旨を学会で報告した際に、学説史研究者からご提示を受けた誤解に基づく質問についても一言しておく。その質問では、ブルーマーは*Symbolic Interactionism* という著書 (Blumer 1969=1991) を、パーソンズらが中心となる構造機能主義に対抗すべく著し、そこで表明された質的調査の諸基準に従ってSIの経験調査がなされていったのではないかというものだった。こうした理解が明記された学説史研究書は管見の限り存在しないと思うが、パーソンズやマートンを中心に社会学理論の展開を検討し、シカゴ学派からSIへという経験的調査の潮流に興味がない方には、上記の誤解もありうるかもしれない。簡単にいうと、ブルーマーの方法論的著作は、実際に書かれた経験調査の著作のあとを追うように書きつがれ、その方法論に関する批判的検討とは関係なく、経験的研究はシカゴ学派からSIへとよびみなく継承されていった。たとえばブルーマーらでトマスとフロリアン・ズナニエツキの『ポーランド農民』(Thomas & Znaniecki [1918-20] 1974) を方法論的に検討したシンポジウムに基づく著作 (Blumer [1939] 1979) が公刊されているが、それも『ポーランド農民』刊行後、二十年ほどが過ぎた時点での再検討であり、その間にも経験的調査は蓄積されつづけていた。ブルーマー自身も経験的研究を実施していたが、実際に、質的調査の実作と方法論的検討を行ったのは、ハワード・ベッカー、アンセルム・ストラウス、そして一九六〇年代以降に著作を発表していくノーマン・デンジンのような旺盛な著述家たちであった。参考文献を含めた詳細については、鎌田 (2019, 2022a) をご覧いただきたい。

それに対して、ミラーはシカゴ大学においてミードの多様な遺稿類を管理、検討できる立場にあり、それをまとめた『行為の哲学』(Mead 1938) の編集にも加わっていた。つまりミラーこそ、残された草稿群へのアクセスを管理し、そこからより真正に近い（と思われる形で）汲みとれるミード像に最接近できる研究者だった。それゆえに、ミラーが発表したミード論への感想を書きおこったことをきっかけに、積年の疑問を尋ねていくブルーマーの書きぶりは真剣であり、そこから得られたミラー流のミード解釈に出あつての驚きのようなものまで文面から読みとれる。

2, ブルーマーとミラーの往復書簡での質疑応答

本節では、経験的社会調査との関連で見た論議領域についての論点を、前稿 (鎌田2021, 2022) での考察も踏まえて略述する。ミードのテキストでは、相互作用やコミュニケーションによって対象への態度である意味が共有されると、その共有の範囲が広まり、普遍的な議論の足場ができると想定されていた。しかし、それはうまくいけばそうなるかもしれないというかなり希薄な蓋然性に頼る特例的事態に過ぎない。たとえば、意味の共有範囲が広がっていく過程そのものにおいても、もともとの意味が変質するかもしれない。すなわち別のものと融合して、元のものとは似ても似つかぬものになることがありうる。また最初に共有されはじめた意味やその指示する事物が、まったく消滅してしまう可能性もある。ミードはその途中を省略して、普遍的な論議領域が共有されることで、科学者共同体が冷静で合理的な議論を交わす場が開かれると考えているようだが、トマス・クーンのパラダイム論以降、科学者共同体の論議領域自体も、各世代に共通する利害関心の網の

目に絡みとられて、必ずしも論理的可能性のみを追究するようには進行しないことが、現在ではよく知られている (Kuhn [1962] 1996 = 1971)。ミード自身の発想からは、小集団に共有された行動様式や、価値観を研究する文化人類学の影響を受けた都市エスノグラフィ (Hughes [1971] 1984; Winkin 1988 = 1999), またシカゴ・モノグラフの諸作⁷⁾ を導く知的枠組みは抽出できない。ミード自身は相互作用やコミュニケーションを強調して議論を展開しているので、その点に関する理論的営為だけを取り出して、社会学者の調査枠組の背景理論と位置づけてもよいと思うが、その普遍志向まで考慮すれば、社会学の経験調査とは両立しないものとなる。すなわちドイツ観念論のような、絶対者の直観的把握から世界の真理を知るという探求の方法をとる場合、自身の内面に沈潜しつつ絶対者の視点を推定する方向に考察が向かい、自身とは異質な他者の生活の場に分け入る経験調査の必要はなくなる。

以下のブルーマーとミラーの往還を参照いただきたい (下線部のみ訳文を添える)。コミュニティ内の分断が、一般化された他者には統合されたものとして反映されるのか、すなわち、子どもが成年に至る社会化の過程では、統合されたコミュニティの価値基準として、矛盾のない形で内面化されるのかどうかを、ブルーマーはミード哲学の専門家としてのミラーに尋ねた。

BLUMER (May 5, 1980) asks Miller: The first question is whether in your judgment Mead meant the “generalized other” to refer

to what was unified and commonly shared in the society or group, or whether he referred to the totality of action in the society irrespective of whether it was unified or commonly shared. One might equate the generalized other to the “voice of the community,” meaning thereby the common meanings and common definitions which are to be found in the community. But there are communities in which there are many voices and differences in meaning and definition. When Mead spoke about “taking the role of the generalized other” did he mean taking only the unified and common posture of the community? Or did he mean that one was taking the posture of the total community whether or not that posture was marked by inner difference and opposition? (Blumer 2004: 121)

下線部の訳文：ミードが「一般化された他者の役割取得」について語ったとき、コミュニティの統合された共通の姿勢のみを取得するという意味で言っていたのでしょうか。それともその姿勢が内部にある差異や対立で特徴づけられているかどうかにかかわらず、コミュニティ全体の姿勢をひとは取得するものだという意味で言っていたのでしょうか。

MILLER (May 28, 1980):

There are communities within which there are many voices. This can include conflicting voices or many different compatible voices. I think Mead would include both. But first let us consider compatible voices or different compatible G.O.s [Generalized Others]⁸⁾ in

7) シカゴ・モノグラフの作品リストや内容の概略、さらにそれについての主要な二次文献の紹介などは、諸作から抜粋した論集、諸作を総合、要約した考察をご参照いただきたい (Short 1971; 宝月・中野 1997; 中野・宝月 2003; 宝月 2021など)。

8) 引用文中の [] はブルーマーの遺稿集の編集者トマス・モリオオーネによる補足で、[] 内は本論で

the same community. This “same community,” such as the Austin [Texas] community, say, includes many lesser communities, e.g., the school community, the Latin American community, the church community (or the Baptist Church community, the Catholic Church community) the business community, the University community, all particular clubs and associations freely established, etc. Also, such organizations as the Rotary Club may constitute an international community. And we speak of the European Common Market Community. Wherever there is an association there is a corresponding G.O. I believe Mead... (MSS p.157⁹⁾) believed there is a hierarchy of G.O.s [in regard to inclusivity and extensiveness] About conflicting voices in the same community [:] If a situation has been defined by the community, then individual members must (a) act in accordance with the definition (the voice of the community) or violate customs if not the law or (b) the individual may, through arguments, etc., try to re-define the situation. This is done through reflective intelligence and the symbolic process.... Whenever disputes over an issue are settled by symbolic interaction, the various parties must resort to a G.O. on which they agree. They must argue from the same general or abstract premises. Of course brute force may be an alternative way of settling differences. (Blumer 2004: 122-123)

の引用者による補足。

9) このページ数は最初に出版された1934年のモリス編集によるもの。出版社は2015年のヒューブナー版と同じくシカゴ大学出版局。ヒューブナー版の章-節番号では20-6。

下線部の訳文：同じコミュニティ内の対立しあう声について言えばこうなります。もしコミュニティによって状況が定義されれば、個別のメンバーは (a) その定義（コミュニティの声）に従って行為するか、それが法でない場合にも慣習に違反するかせざるを得ず、さもないければ (b) その個人は議論などを通じて、状況の再定義を試みねばなりません。このことは自身を振りかえる知性を通じてなされ、シンボルを用いる過程です。

このミラーの解答は、ミードの社会哲学、社会心理学の研究者の標準的なものと思われる¹⁰⁾。一般化された他者として統合されて内面化されるべきコミュニティ内に複数並立する価値観が齟齬をきたしている場合、そのどれかに従い、どれかには違反するか、あるいは、状況の再定義を目指して努力するということが書かれており、ミードのパーспекティブ論の原理に従えば、コミュニケーション、相互作用を交わす人々のあいだの社会性によって、互いの視界や視点が融合して認識の共有部分が増えることで、共通の関わりのお土台が築かれるはずである。しかしそれが理想論に過ぎないことは、新聞の三面記事をにぎわす犯罪、詐欺、あるいは誇大広告のような不正に消費者を搾取する商法、行政の欺瞞や実質的な政策の破綻を糊塗する国家のイデオロギー教育などを考えれば明らかであり、交渉としておこなわれる相互作用において、実際の行為者は自身の手持ちカードをすべてさらすことなく有利に事を運ぼうとすることから、社会性による新たな価値観の創出はどこかの段階で阻害されがちである。

ブルーマーの問題提起は、この書簡の時点

10) すなわち、よく見かけるタイプの文言だが、経験調査に従事する社会学者が抱く疑問に答えるものではないという意。

で初めてなされたものではなく、シカゴ大学に勤務していた哲学者T.V. Smithの、ミード没後すぐ*AJS*に発表された論文でなされたものと同様である (Smith 1931)。

スミス論文の結末部は、大意において以下のような問いかけとなっていた。すなわち、多くの対立、抗争、戦争状態が観察される社会、世界において対立する人々を調停する統合された「一般化された他者」の役割取得がどのように可能になるのかというものである。

スミス論文掲載時の*AJS*の編集委員にはブルーマーも名を連ねており、この問いは社会学やプラグマティズムとは一定の距離がある人気哲学教師の名前で発表された。ただしそれをスミスの立場から見ると、著書を残さず下手をすると無名のまま消えていく可能性すらあった同僚、ミードの名声が高に葬られるのを惜しみ、企画中の遺稿集の出版に向けた注意喚起の手段として公表された論文であった (Huebner 2014: 120)。しかしその後、この問いは放置され、ブルーマーはミードをSIの源泉の一人に位置づけたものの、ミード哲学と経験的社会調査との接合のあり方に関しては、疑念を持ちつづけていたと推察される¹¹⁾。

11) ただしミードをめぐる多くの論争はIとmeの位置づけをめぐるものであり、一般化された他者や論議領域の概念には特に論争のインクが費やされることはなかった。Smithのミードに関する文献3種 (Smith 1931, 1932, 1932a) のうち、2種 (Smith 1931, 1932a) はKurtzによるシカゴ学派に関する一次、二次文献の書誌に掲載されており、専門家のあいだでは知られていたであろうが、ミードに関するHamilton編の浩瀚な二次文献集には収録されなかった (Kurtz 1984: 240-241; Hamilton 1992)。さらに言えば、ミラーの著作にはスミスのミード理解の深さに疑義を呈するコメントが見られ (Miller 1973: xx, n.25)、哲学分野でのミード解釈者のあいだでスミス論文の価値は低く見られていたようである。

なお、本節で紹介したブルーマーとミラーの質疑は一連のやり取りの終結部分にみられるものであり、それ以前のブルーマーの問いかけを検討すれば、ミラーの解答が得られるまえにブルーマーが想定していたミード解釈を、ある程度、推測できる可能性もある。

3. 学説史上の解決——社会調査のルート・メタファーとしての社会的世界論へ向けて

ミード哲学はSIの社会調査の源流にあるとブルーマーは位置づけているが、先述のように、残されたミードのテキストには具体的な社会調査を導く概念装置や考え方が含まれていない。

MSS (Mead [1934] 2015=2018) のplay, game段階から他者の役割取得、一般化された他者の役割取得などについての考察は、幼児、児童が成人に達する過程で身につける基本的な能力についての考察ではあるが、現実の社会調査で観察、データ化する対象ではない。どの程度、一般化された他者が一般化されたものなのか、また論議領域がどの程度のものであるのか、具体性、抽象性、普遍性のレベルで考えられているかについては議論の余地がある。

社会学の経験調査で扱うのは、人間集団のごく一時的な取りきめから、文化のレベルで観察される慣習や習慣、国民全体を拘束すべく制定された法律に至る多様な規則や約定などである。その際、人類全体に思いを潜めるのではなく、小集団内の相互作用を観察して文化が変遷する過程を記述し、多様な文脈で集積された小集団ごとの知見を比較検討して何らかの理論を形成し、事実即して洗練していく研究手づきき想定される。そして個別具体的な文化や慣習的行動を比較するたびに何らかの洞察が得られ、その試みを無限に繰り返した場合に、「普遍」に近似したものが垣間見える可能性を論者は否定しないものの、人間としての研究者自身の有限な道程において、「普遍」に手は届かないと考える。

それに対し、神が創造した世界において、絶対者ならばこう考えるだろうかこう行動するだろうか思考実験を行い、各種のディテールにわたる絶対者の世界支配の諸相に、直観により一挙に到達しようとするのが、ド

イツ観念論の方向性であり、そこではルター派の「キリスト者の自由」そして「万人司祭説」によって、聖職者でない平信徒でも絶対者の立場を想定して一挙に世界観を形成、獲得する思考法が当然視されている（Luther 1520=2011）。デューイ同様、基本的にヘーゲル学者だと思われるミードは、常に相互作用の現場から発して、複数のパースペクティブが融合、統合されていく諸段階を省略し、「普遍」のレベルに「一般化」され、「宇宙大」にすら広がりうる合理的科学の思考に支配された抽象的言説の世界の構想に向かう。こうしたドイツ観念論経由の拭いがたい普遍志向は、ブルーマーやその同僚のシカゴ学派社会学者の研究法とは齟齬をきたし、禁忌とされただろう。それゆえ、エスノグラフィでミードを枠組みとしてそのまま使用することは難しく、ブルーマーも、ミードをsymbolic interactionistとして大きく扱いながら、その重要概念である一般化された他者や論議領域などの概念に、ブルーマーの生前には非公開だったミラーとの往復書簡で疑義を呈していたのだと、論者は考えている。

逆に、それでもミードの理論構成に何らかの解釈を施すことで、SIの経験調査の基本理念を抽出できるのではないかと考えるなら、問題は具体的な社会集団や社会現象を対象にethnographyを作成する際に参照される具体的な集団における行動様式、価値観、文化などを記述するガイドとして、一般化された他者や論議領域がもちいられ得るかということになる。その場合、すでに本論の第1節でみた複数形で記述される（諸）論議領域（群）の記述と分析が考えられる。しかし公開されたミードの議論自体はドイツ観念論由来の普遍志向に浸されているので、それ自体に依拠することはできない。

実際、公開されたシカゴ学派、第二次シカ

ゴ学派のエスノグラフィにおいて、ミードの一般化された他者や論議領域などの概念が直接使用されることはなかった。唯一、ミードの議論を踏まえた概念装置として、ベッカーたちの*Boys in White*での医学生たちが厳しい学習ノルマを達成するために共有する集団パースペクティブ（group perspective）というものがあり、これはミードの『現在の哲学』での、コミュニケーションを重ねることで対話者のパースペクティブが融合し、新たなパースペクティブが形成される社会性（sociality）の考え方を踏まえている（Becker et al. [1961] 1977; Mead 1932=2001）¹²⁾。

社会現象を多様なデータ・ソースに基づいて検討、分析する際、世界のすべてを論じられるような枠組も紙面の余裕もないとすれば、暫定的にでも現象として考察する領域を限定、制限することになる。その際、ミードが論じている論議領域も複数形の論議（諸）領域（群）という形でなら、格好の経験調査向けの概念となりうるが、具体的な現象を見る社会学者には、ミードが論じたような、相互作用の場で何かの事柄が創発し、それをめぐる意味や議論が統合され抽象化された科学的言説が成立するまでの過程を現場で観察するのは難しく、実質的には（諸）論議領域（群）が複数併存するままに相互に干渉し、

12) 公開テキストでミードを調査方法論の原論として検討した文献はシカゴ学派からSIに通じる諸系譜で管見の限り想起できない。ただし、公開に向けて改稿されるまへの博士論文の段階では、大学院生たちがミードらの概念装置を検討する考察を書きとめ、専門家として世に出る際に、再考を加えることもある。たとえば、セファイが「社会的（諸）世界（群）」と「論議（諸）領域（群）」概念を関連づけた考察で、デューイやミードを枠組みとして検討したシカゴ大学での未公開博士論文が列挙されている（Roy 1952; Stone 1959; Uyeki 1953; Cefai 2015）。その意味ではミードやプラグマティズムの哲学はエスノグラフィに無関係と言いきることはできず、各人が何らかの考察を経て専門家として自立する際の関門となってきたはずである。

合流, 分派しつつ交わりあっていく様子自体を観察, 分析することになる。その場合, その中間領域である曖昧な部分の暫定的な領域確定が必要となるのだが, その際にミードの「社会心理学」講義のもう一人の継承者であるエルスワース・フェアリスが, クーリーの一次集団 (primary group) 概念の使い勝手を模索した形跡が残っている (Faris 1932; Cooley 1909: 23-31 = 1970: 24-31)。その際, 一次集団概念で重要視されている家族などの親密な集団における対面的接触という側面を再検討し, 家族の一部が国境を越えて移民したり, 元の住所を離れて移転したりしたあとも, 手紙のやり取りや時たまの訪問などを通じ, 対面的接触は最小限しか交わさずに親密な関係を保つこともあるといった例を考察し, 一次集団概念を拡張しようとしている。さらに, 対面ではなく, 書面, 電信, 音声, 映像などを通じた価値観や社会的活動の共有から生じる二次集団 (secondary group) という概念が構想されていくが, これを平たく表現しなせば社会的世界概念に直結する¹³⁾。

13) フェアリスの第一次集団概念の検討は, むしろ社会学の基盤となる「集団」というものについての一般の考察となり, 対面という要素抜きでも集団意識を持ち, 集合的な行動も可能になるという人間の社会生活の基本的側面を再考しようとしているもののように読める。それは, 対面, 非対面の相互行為, 特に, 電信, 電話, 信書なども用いて交わされる集団的相互作用を論じる感受概念となりうるものでもあった。論者自身にとっては, シカゴ学派のなかでも注目度の低い中心的人物として, フェアリスの著書 (Faris [1937] 1969) を検討した際に, 目に留まったテキストだが, ミードの社会心理学の講座の継承者の一人で社会学部長 (chairman) という彼の戦略的位置を考えると, 後続研究者の便宜を図るべくなされた原論的な研究の一環として再検討に値するものではないだろうか。

さらに想起を進めると, トマスとズナニエツキの『ポーランド農民』(Thomas & Znaniecki [1918-1920] 1974) は当初5巻本 (Boston: Richard G. Badger, The Gorham Press) で出版されたが, 完結後, しばらくして1927年には2巻本 (New York: Alfred A. Knopf) に再編された。いずれも巻頭には著名な

コミュニケーションを通じて社会 (society) は存在するというデューイらの主張を, この表現はタモツ・シブタニは社会的世界論に要約しつつ引用している (Dewey [1926] 1929 = 2017; Shibutani 1955, 1962)。このまとめ方は, 非対面の接触による集団のつながりに着目しつつ, 社会調査の展開を促す概念化の姿勢を示すものだろう。

もともと地域の社交界や町内会的な有力者の会合を指す言葉として定着した「社会」は, 人々が交際する「社交」の状態そのものを指すニュアンスを含み, 特定の領域を指す学術的概念として転用することは難しい。そのために20世紀初頭の段階から日常語としても使

「方法論ノート」を置き, 5巻本の最初の2巻は, 「一次集団の組織 (primary group organization)」と題された第1部 (2巻本では第1巻, その他の部分は第2巻に収録) であり, 第3巻が2巻本での第4部に当たる「移民の生活記録」と題されたウラデックという青年の自伝となっている。さらに第4巻が2巻本での第2部「ポーランドにおける解体 (disorganization) と再組織 (reorganization)」, 第5巻が2巻本での第3部「アメリカにおける解体と再組織」となる。そして, 静止した状態よりむしろ過程の名称である解体と再組織と呼応して, 第1部にorganizationが描かれるので, これも過程の側面を重視して, むしろ「組織化」と訳すべきかもしれない。とりあえずここで, 一次集団と言っているのは, ポーランドからアメリカなどへと移民した人々の家族や親族の集団が, 書簡のやり取りを通じてどのように交流し, 情報を共有して連絡を取っていたかを手紙自体から知るという試みであり, 『ポーランド農民』の執筆時期は, 世界最初とされるバージェスの「家族社会学」講座が開設されるまえであり, 社会学的研究の対象として「家族」を設定しにくい状況にあったために, 「一次集団」なる言葉が採用されたと考えてもよいだろう。さらに国境をまたいで, 書簡で連絡を取りあうポーランド出身の家族集団というトマスとズナニエツキの記述の対象自体が, フェアリスが「一次集団」概念に関して考察, 検討したものである。すなわち親密な対面的なコミュニケーションを前提として成立するかに見える家族集団が, 文書における書字コミュニケーションによって絆をつなぎ続けているという例が, 移民たちの間でごく普通にみられることを, 二人の著者がすでに例示しており, 一次集団概念の統合性は, 対面的な親密さと, 書面コミュニケーションによって維持される遠隔的, 非対面的な親密さのあいだで分解されていた。

われてきた社会的世界という言葉を用いるのだが、社会的を付けずに、「世界」だけを取り出せば、それは人間抜きでも存在、存続できる。むしろ人間抜きで、野生生物が食物連鎖のピラミッドを構築してバランスを保っていく「世界」の方が、物事はむしろうまく（自然に）進行するようにさえ思える。19世紀中葉に、新たな用例が付けくわえられた社会的（social）という形容詞を冠することで、複数のレベルの異なる社会的世界で一部を重複させ、共有しあいながら併存する形態も考察しうる柔軟な名辞が手に入ったのである。

さらに学説史をひもとき、パークとアーネスト・バージェスの社会学文献資料集、『科学としての社会学入門』を検討すると、クーリー自身の著作の抜粋が項目を立てて収録されているわけではないものの、章ごとに解説を加えた地の文では、随所に彼についての言及がある。さらに、第5章「社会的接触（Social Contact）」（Park & Burgess [1921] 1924: 280-338）に、「一次、二次の接触（Primary and Secondary Contacts）」（Park & Burgess [1921] 1924: 280-338）という項目が設けられ、パーク自身の論文「都市（The City）」（Park 1915）から「二次的接触と都市生活（Secondary Contacts and City Life）」「二次的接触としての広告（Publicity as a Form of Secondary Contact）」（Park & Burgess [1921] 1924: 280-338）と題する抜粋が掲載されている。ここでは、序詞から派生した一次、二次という形容詞が標題の文言に用いられ、クーリーの一次集団概念およびそれから派生する二次集団というひろく流布した概念を転用したのではないかと思われる。ジャーナリストだったパーク自身の移民新聞への関心にも由来する項目でもあるだろう。移民社会を流通する活字コミュニケーションを縫合糸として、多様な関心事が共有され、共通見解に基づく

利害関心の主張も可能になった（Park 1922）。当時は、ラジオのような音声による放送メディアの黎明期に当たり、それに先行する活字印刷メディアを取り上げて考察する有効性は、揚言の要もない当然のものだが、こうして対面的ではない多様なメディアを通じた集団形成まで視野に入れることで、社会的世界論へと盛りこまれる社会現象の範囲は柔軟に拡張されたはずである。引用テキストの文意を見ると、都市における他人同士の冷ややかな接し方を二次的接触として語っているようだが、そこから文書、放送、電子メディアを通じた非対面的な接触に論じすすむにはあと一歩を踏み出すだけだろう。

先述のように、量的、質的社会調査は、ブルーマーの方法論的促しによって生じたわけでも、ミード哲学に準拠して模索されたわけでもなく、ブルーマーやミードとは無関係に発展したと考えても差しつかえない。とはいえ、のちのちそのルート・メタファーとして整備されることになったのは社会的（諸）世界（群）（social worlds）であり、これは論議領域概念からドイツ観念論的な普遍志向を取りのぞき、リニューアルしたものと考えられる。具体的な位置づけや概念的考察は1970年代末のストラウスの文献を待たねばならないが、シカゴ・モノグラフ『タクシーダンス・ホール』『ゴールド・コーストとスラム』などで、社会的世界という言葉はすでに活用されている（Strauss 1978; Cressey [1932] 1969 = 2017; Zorbaugh [1929] 1976 = 1997）。Socialという形容詞の意味内容が変容し、国民国家レベルの社会集団全体にかかわって影響を及ぼし、その全成員が問題点について心を悩ますべき「場」とを指ししめすようになるのは、OED（2002）の文例においてもサン＝シモン派の「社会主義」的文献が登場する19世紀中葉のことである。socialに関する多様な言

葉はそれゆえに、新たに編み出されて意味内容も定まらない不定形の領域や状況を指ししめすものだったと思われるが、そのなかでも社会的世界には、社会のなかで問題視されがちな状況、事態、場面を含む「世界」に注意を向けるための概念だったのかもしれない。

セファイの論文 (Cefai 2015) のタイトルになっている社会的 (諸) 世界は、社会調査の対象として区切られる論議領域に対応する。セファイ自身はミード哲学における論議 (諸) 領域概念は、社会調査にかかわる文献においては社会的 (諸) 世界概念で代用されると考えているようだ。ここでセファイは論議領域をMSSの本文に一度だけ登場する複数形 (universes of discourse) で語る。複数形での論議領域概念はミードのテキストでも異例であり、実質的にモノグラフや調査の文献で論議領域の複数形が用いられてきた例は、管見の限り、思いあたらない。また、この概念が用いられるコンピュータ関連の情報学の分野では、universeの「普遍的」な語感を嫌忌してか、domain of discourseと言いかえているようである。そうした事情で、ミードの一般化された他者や論議領域に代えて、もっと中立的な言葉「社会的 (諸) 世界」が多用されることになった。

アンセルム・ストラウスの文言を編集して、その内容をまとめると以下ようになる。

オペラ、バレエ、野球、サーフィン、芸術、切手収集、登山、カントリー・ミュージック、同性愛、政治、医療、法、産業、数学、科学、カトリシズムなどに関する社会的世界が、空間、対象、技術また技巧、イデオロギー、他の社会的世界との交錯、メンバーのリクルートなどを通じ、もとのものから分かれて下位世界に分化、ほかの社会的世界と合流し、新た

な社会的世界として勢力を拡大する。
(鎌田 2014 : 35)

この考え方により、社会現象の集団単位での変遷が多種多様な形で考察できる。とはいえ、社会学者によらずとも、歴史学者の社会史や哲学者の思想史、美の様式や思想の変遷を語る美術史、考古学での人間の手による加工品の様式史、政治権力の変遷を辿る政治史などが、普通に語られてきている。そうした諸分野に加え、19世紀に発明された社会学の特徴、すなわち人間が集団として行動することで発生し、観察も可能となる諸特徴の記述、分析、考察を盛りこんだ歴史への取りくみとして、この社会的世界の分岐、交差の研究を社会学でも特に重視する必要がある。

この考え方、あるいは視角 (perspective) はSIに由来するゆえに、行為者やその集団の相互作用に留意し、さらに人間の内面的な活動としての思想やイデオロギーの動きが集団メンバーのリクルートや組織の在り方にも反映する様子を記述しつつ、何らかの基準や時の過程のなかでの集団状況の変遷を整理する諸段階を設定し、観察される行為者たちの行動や発言を解釈していくことになる。要するに、他分野で行っている歴史記述に人間の集団生活や信念体系などの把握を加味しながら、時の経過のなかで生じる「過程」の記述に臨むことになる。もちろん歴史とは物語 (histoire) であり、その語り方には自ずと話法 (narrative) の型が生じてくると思われ、どのような話法に従って語るのかについても意識しながら具体的な語りを紡いでいくことにもなるはずだが、それは実際の社会的世界の記述が、いくらか蓄積されていった段階で試みられる言説分析の問いとなるだろう。

すでに見たようにストラウスの社会的世界論では、スポーツ、趣味、嗜好、芸術愛好、

美術、芸能の実践など多様な活動を含みうるものとして考察の対象を設定している。社会生活を彩るこうした諸活動には、歴史の原動力となるほどの影響力はないかもしれないが、場合においては多種多様な強度で蓄積される変化、変遷が社会変革のきっかけとなり、新たな生産様式の発明の手がかりすら与える社会発展の原動力としても、それなりの重要性が指摘できるものではないだろうか¹⁴⁾。

4、公共圏論（社会的世界の派生概念）と熟慮の政治をめぐる応用的考察—哲学者のプラグマティックな観念論と社会学者の現実的な悲観主義

最後に、論議領域と社会的世界概念の関連から派生するもう一つの重要概念として、ハバーマス以降の公共圏（Öffentlichkeit, public sphere）概念についても考察する¹⁵⁾。

14) たとえば、江戸時代の煙草で吸う煙草から現在の紙巻きタバコの形態が明治時代に発明され、急速に普及して、現在では、嫌煙派による愛煙派の公共の建物内からの事実上の排斥を見るに至った栄枯盛衰の歴史は、単なる嗜好品の発明、発展史にとどまらず、国による専売化を経て税源の一角を占め、保健衛生方面からの攻撃により健康被害が主張されて排斥されるに至る産業としての発展史である。当然のことながら中国で栽培されていたお茶の葉がインドに持ち出されてからの世界的展開や、日本に到達し紹介されてからの各種の喫茶習慣、茶道の発達、さらにあらゆる薬物などの発見、発明史のすべても、詳細にたどれば、各国の経済の一角を担うほどにまで影響力を及ぼしつつける歴史の諸ページを構成するだろう。

15) 公共圏論は市民社会論その他、多くの重要な論点とかかわるがゆえに、この小論の一節で扱うには不適と思われるかもしれないが、論者はすでにこの概念を社会的世界論と結びつけ、SIの概念装置に取りこんでいる（鎌田2014）。そしてシエスの憲法論などを通じた法学的貢献により、最高法規としての憲法に人権思想を取りこんで保証することを、広く国民に約束する各国政府の姿勢を英仏の諸革命後の不可逆的な社会変化、および議会制民主主義制度の根本と見なして、憲法によって人権を保護するという論点にかかわって活動し保持される社会的世界の一形態を、現代社会における公共圏と見なしている。こうして公共圏論は社会的公正の視点からSIを補強するmini conceptsの一つとなる。したがってここでの公共圏概念の扱いも

ハバーマス自身、公共圏について、当初、英仏の諸革命によって達成された人権、憲法などをめぐる諸制度を、近代社会の形成にとって重要な指標として、そこで形成される公共をめぐる重要問題について、権力作用から解放されて自由に議論を交わすことができる論議の場として構想した。しかし歴史的に18世紀から19世紀の政治体制、産業構造上の激変期に成立した公共圏は、政治的プロパガンダと商業的広告が投入され、統計的に処理されて社会の諸構成員の心身が操作される場所として変容し、転落したと考えた（Habermas [1962] 1990 = [1973] 1994）。ところが、その後の著作では、政治権力や商業資本による人心操作の場として墮落、転落した大きな公共圏に浮かぶ泡のように、公共の事柄について議論を交わし、自由な討議を行う小さな公共圏が並立する状況として、ハバーマスは現代社会を捉えなおしたように見える（鎌田2014）。世界史を動かした英仏の諸革命の政治変動から生じた大きなうねりが政治と商業の巨大勢力に喰いあらされて凋落してから、小さな渦のような公共圏が処々に誕生してはそれぞれの目的に応じて存続して消えていくといったその姿は、問題となった公共の話題を中心として組織される論議（諸）領域（群）でもあり、（電子的な、仮想のものまで含めて）それぞれの討議の場や関係者が相互作用する時空を社会的（諸）世界（群）として記述していくことができる。

公共圏という発想自体は、カントの「啓蒙とは何か」に淵源するものとして、ドイツ観念論的な由緒をもつ概念だろう（Kant 1784 = 2006）。そこで、思想家がその見解をひとたび出版によって江湖に投げ、当該の見解は無数の読み手による受容を経て、権力関係に

SIと連携する範囲内での使い勝手を考察する程度にとどまる。

は捉われない自由な討議の対象物となり、さらにその討議の産物が出版によって江湖に投げられて、新たな議論を生む糧となるといった反復がイメージされている。ミードが常に考察した普遍志向の論議領域における討議の姿も、そこにある。

ドイツ観念論の産物としての公共圏は、政治的な利害関係に拘束されずに自由な議論を交わす場として必要とされる理想的発話状況が実質的には成立しないので、アメリカの社会において存在したことはないとする研究者もおり (Schudson 1992=1999)¹⁶⁾、論者自身も現実の日本社会においては、日本占領時代の米軍がGHQとして与えた日本国憲法により、身体、思想、表現の自由などが表面的に保証された疑似的公共圏¹⁷⁾しか、存在したこ

とがないと考える (軍事、電力産業などの実態やあるべき姿を自由に議論できる公共の場が存在しないため)。したがって、厳密に権力関係に絡めとられることなく自由な討議が可能な公共圏は、絵に描いた餅のように観念論を具現化したものにすぎない。ミードの見解をさらに敷衍するならば、そこでも社会性の原理により対話者、討議者のパースペクティブが融合して、新たな価値観が創出され、科学的吟味を経た高次の普遍へ向けて議論は深化していくはずである。ところが、現実社会でこうした討議のなかでの議論の深化が生じることはまれであり、実際にそうした事柄が生じる現場の探求、観察も難しい。理想的な討議の世界が立ち上がり議論の深化により社会の姿が一新されることを夢みるのはいいが、社会学者なら眼前の現実の記述、分析に向かう方が生産的なのではないか¹⁸⁾。実際、社会において、友は友、敵は敵として政治的に合従連衡、対峙する関係が取りむすばれ、昨日の友は、明日は敵、そしてその逆もしかりといったように、友、敵関係の組みかえは世の常とはいえ、それは権力関係と切りはなされた議論の結果ではなく、権力を帯びた社会的諸勢力の露骨な自己保持をめぐる闘争の帰結として観察されるだろう。

社会学者は何らかの手段 (できるなら社会調査) によって、現実の社会過程に立ちあい解釈を加えることを職務としている。その

例を見ているからである。この場合は、おそらくは市県議会と市県行政、そしてPFIに応じた事業者のあいだで合議や入札などが遂行され、市民への説明会などは開かれなかったように仄聞しており、高橋が考察したような市民の反対の声などが上がる機会さえなかったように思われる。また論者が購読している全国紙の地域ニュースなどのレベルでも、注目を集めることはなかった。

18) ただし、既存の社会運動に伴走し、あるいは新規の社会運動を組織し活気づけるように記述、分析をつづけるアクション・リサーチという選択肢はもちろん存在する。

16) 公開の政策説明会や討論会に出席している人は全員がすでに支持者を内心で決めていて、説明なり議論なりを聞いたうえでだれを支持するか決める人などいないから、政治的利害にとらわれずに自由に公共の問題について論じあう公共圏など過去にも現在にも存在しないという論旨。別にフェミニスト的な視点からの公共圏概念の批判として、言及の機会が多いFraser (1992=1999)も参照。

17) 口頭発表で、論者はこの言葉をたびたび用いているが、公刊された論考でははじめて使用する。類似の言い回しがないかと検索してみると、「疑似公共性」というものがあつた (高橋 2010; 井上 2003, 2006)。高橋が取りあげた具体的なケースは、とある公園整備において、事業者からも開発費の出資を募るPFI (Private Finance Initiative) によって計画が進みつつある段階で開かれた住民への説明会でおそらくは環境派と思われる住民たちが反対の声を上げ、その後も町長に対し陳情書を作成して反対をつづけたところ、PFIは立ち消えになり、各方面合議のうえ、乏しい町の予算で最低限の公園設備を設置したという経緯である。そして、PFIを用いた公園建設に反対した町民が声を上げた時点の公共性を、疑似公共性と見て、一部の住民の見解に基づく偏狭な視野からなされた議論が影響力をふるう場のように記述して批判している。しかしこの事例は、PFIを通じた事業者による公園地の商業利用を、環境派市民の説明会での質問や町長への陳情などの活動で阻止した事例と考えれば、地域住民のイニシアチブがそこで発揮されたものと再解釈することもできる。このように考えるのは、論者の住む自治体においては、公園地で飲食店などを運営する事業者などを含めたPFIによって、次々に再開発が着手され完了していく事

際、相互作用やコミュニケーションを通じた相互理解が理想的な形で遂行されない数多くの事例、さらに対面状況で言葉や身振りを交わす人々が、共通の基盤を形成してチームを結成するには至らない場合も目撃する¹⁹⁾。したがって、ミードが考える社会性の原理で形成される人々の絆にも、親疎さまざまな段階を想定する必要がある。その場合、共通の基盤としての論議領域の共有にさえ至らない表面的なかかわりに終始するなら、そうした相互作用から公共の議論を展開して社会変革に至るなどといった筋道を考えるのは難しい。ただし、孤立した人も荒野で叫ぶ声のように政治的、社会的見解を「出版」して江湖に投じることは可能かもしれない（「出版」を通じた公共圏の形成。本節冒頭で触れたカント的な後世の合理的な議論への投企。それも出版活動を通じて「言っただけ」で終わり、公共の議論を形成するように注目を惹く努力を怠る場合は黙殺される）。そして日本のような民主主義を標榜する社会で選挙を行い、議

員による民意の汲み上げ、議会での審議、立法行為、そしてそれに基づく行政活動があるとするれば、そこに生じるものは行政予算の執行に伴い、民意の深層には達することがない利害関係者間の調整活動でしかないかもしれない（本節b項で敷衍する土建政治）。

ブルーマーを含む社会学者たちの、こうした社会的コミュニケーションの悲観的な側面の実体験に対し、哲学者であるミラーの解答は、ミードの各種テキストの表現内容の字面を忠実に読解し、衷心から再現して繰り返すもので、相互作用する他者間のコミュニケーションによって生じる異質なパースペクティブの融合からより抽象度が高いパースペクティブが形成され、その究極において論理学者（ブル）の言う論議領域が到来するとするもので、こうした社会性をこそ、民主主義社会における社会改革の基盤と考える（公共圏としての論議領域）。

ここでミラーに代表される社会性に媒介されたパースペクティブの融合による普遍的論議領域を目ざす議論の深化、そしてそれがもたらす社会の改革を構想する方向性をプラグマティズム哲学が隠しもったドイツ観念論的な傾向と見て、「プラグマティストの観念論」（pragmatist idealism）と呼ぼう。そして、ブルーマーを代表とし、上記のような論者自身を含む社会学者自身の、政治、経済の優先から生じる社会における言論活動の不毛性の自覚を前提とした諦念を、「社会学的現実主義」（sociological realism）²⁰⁾と呼んで対比させたい。ミラーのように、ミード自身の議論に肉薄しつつその社会哲学を再構築したいと願う人々から、ブルーマーたち社会学者は、二歩

19) 社会調査、特にフィールドワークを伴う質的社会調査においては、対面的相互作用のなかで調査者が調査協力者と、直接、人格的に触れあい、言葉を交わすことにより、ミードが論じた社会性の原理が発動しラポールが形成されるように思われる。そこで創造的で自由な討議の結果、新たな価値が創発するのではないかという可能性について、若干、考察しておく。結論から言えば、社会調査においてそうした成果が得られる可能性はないとは言えないが多くの望みならず、最小限のものにとどまる可能性が高い。あらゆる調査、探査、探索、捜査、捜索の行為と同じく、短時間、対面して言葉を交わしただけで、協力者の内面を十分に知りうるには限らない。また参与観察によって、ある程度、長期にわたる付き合いをした場合にも、具体的な交流場面では参加者全員がその時期、その状況の特有の課題に対処するだけで精一杯で、その裏面で重要な社会過程が進行していたかどうかは、論者も長期にわたる出来事を記録したフィールドノーツを整理、編集しながら、鳥瞰的に見渡した際にはじめて悟ったことだった（鎌田2020）。ゆえに調査終了後に、社会的相互作用の無自覚な蓄積としての、フィールドノーツの分析からしか、新たな視角や価値観は創発しないというのが、論者の経験から得られた実感である。

20) realismは實在論と訳されてしまうかもしれないので、ブルーマーの用語系に倣い自然主義（naturalism）とした方がよいのかもしれないが、idealismと平仄を合わせてrealismを採用した。

三步と道を踏みはずしつつ距離を取り、現実社会の分析に向かってきた。その足どりを、社会学者や社会学説史研究者は、20世紀社会学やその社会調査の営み自体のなかに、ミードが書きのこした思考との齟齬には無自覚なままに見出し踏みかためてきたのであった。

こうした論点に、論者が研究活動を通じ知りえた社会的現実を想起しながらさらに肉づけして、本稿の締めくくりとする。

a, 精神保健福祉

まず、論者がかつて研究していた精神保健福祉の分野での精神障害者患者会運動のことを考える（鎌田 2020）。当事者の運動ではありながら、これは病を抱えた生活を維持して本人のQOLを高めることが目的となり、必ずしも政治的な主張を公の場で行うことにはつながらない。本人の穏やかな生活を取りまく包括社会の側にも大局的な状況の定義があり、実際の精神障害者の生活に親しみをもたない人ほど、社会を覆う価値観として、精神障害者は犯罪者予備軍であり、極力、病院などの施設に隔離しておくべきだという社会防衛的な考え方を共有している。ところがそれは一面の真実に過ぎず、犯罪者予備軍と呼べるかもしれない精神障害者は少数で、大多数の人たちはよほどのことがない限り、狂暴性を発揮することはないおとなしい人たちだという事実は共有されない。こうした状況の定義に取りまかれながら当事者たちの生活を向上させ、就労支援まで行うのは当事者家族、行政、医療機関に雇用されたソーシャル・ワーカー、そして地域支援施設で働く支援者たちの役目となるが、しかし保健所の相談員や地域の支援職によるある種の啓蒙活動は、社会の片隅で、主に当事者の周辺の人たちに向けてのひっそりとした取りくみとなり、社会的に共有された精神障害者は犯罪者予備軍とい

う大きな状況の定義を覆すまでには至らない。論者自身のフィールドワークは平成の前半に限られ、この20年ほどの状況は把握していない。ただし近年は、論者の家族が当事者となり、論者自身は当事者家族になっている。そこから見ると、いろいろ変わったようであり、本質的なところはそんなに変わっていないのではないように思える。自由な社会的討議によってもたらされるべき変革が、社会の頑固な現実 (obdurate reality)²¹⁾ に拒まれて成就しない一例であろう。

b, 『アメリカのディレンマ』, Black Lives Matter

アメリカ社会におけるアフリカ系の人への差別、すなわち人種差別 (racism) は、『アメリカのディレンマ』としてグンナー・ミュルダールがまとめた本 (Myrdal 1944) のテーマになっており、マートンはそれを予言の自己成就の強力な事例として論じた (Merton 1968: 476 = 1961: 382)。

簡単に述べると、アメリカ社会で主流の地位を保持するヨーロッパ系、コーカソイド系のいわゆる「白人」は、自由な社会としてのアメリカにおいて、すでに平等な存在として

21) 社会構造という用語を嫌うブルーマーが社会的慣性にも阻まれて合理的、理性的な解決や改革が成就しない状況を指して用いた語。ブルーマーの著者から規範的な表現を抜き出すと、以下の通り。

This resistance gives the empirical world an obdurate character that is the mark of reality. (Blumer 1969: 22. 邦訳ではp.29)

この文脈では哲学における観念論と实在論の区別を論じ、世界は自由自在に名づけ変えられるものではなく、世界に見出される事物には過去の経緯に拘束される「抵抗感」が伴うと論じているようだが、本論ではこれを、マートンが「予言の自己成就」論文で、人種、民族差別の問題など、解決困難な事柄に関し、ウィリアム・トマスという言葉から「状況の定義」概念を援用しつつ語った内容と、同じ考え方を提示するものと見なす。参照箇所は次のb項に掲げた。Best (2006) もご参照いただきたい。

公民権、市民権を認められたアフリカ系、ネグロイド系のいわゆる「黒人」を対等な存在として扱っていると自称しながら、かれらをスラム住まいに追いこむ不動産利用法制限（restrictive covenant）を利用して、白人が住む地域の不動産を黒人には売らず、また主に白人がすむ地区に黒人が引っこしてきた場合には速やかに白人たちはその土地を離れて、別の白人主体の地域に住みかえるなどのやり方で、表立ってはその存在を公言しない形で黒人と白人の人種による分離（racial segregation）の維持を黙認し、それに加担してきた。こうした多岐にわたる方法で陰湿に黒人の労働機会²²⁾、居住の自由を制限し、白人に有利な社会の変革を拒みつける実態は、現代社会に観察できる悪循環であり、ミードが語る社会性によっても、これまで100年近くも事態が改善されることがなかった事例と考えられる（Duneier 2016）。

c. 熟慮の政治と日本社会におけるその挫折

ミラーが語るミード思想のような政治的、社会的な楽観主義「プラグマティストの観念論」は、彼だけではなくほかの哲学者にも観察でき、たとえば『21世紀のミード』（Burke & Skowronski 2013）の第4部に、現代社会の変革の基盤としてのミード理論についてまとめた論文が集められている。

そのうちWoods（2013）の「ミードと民主主義の社会的基盤」と題する論文で、かつて日本の政権与党だったころの民主党で、参加型民主主義（participatory democracy）、熟慮民主主義（deliberative democracy）と言っていたものものもとなった熟慮（deliberation）という考え方で、アメリカにおけるその実践例を取り上げている。州議会などに市民が参

加して要望や意見を述べる日を設ける施策は、Frederick Wiseman（1999, 2006, 2020）のドキュメンタリーで記録され、その映像も見る事ができるものの、代議制の枠を超えて議員以外の発言を許すといった形で、市民が直接、地方の政治に参加するといった場合は、管見の限り現状の日本では考えられない。日本ではむしろ行政担当者と利害関係者、主に工事担当者が、一応、住民の利便性を図るためと称して、実は自分たちの都合を優先して、建物を作り土木工事をして公共性を口実にしているように見える。住民向けの説明会やパブリック・コメントの機会は、決まった計画について説明するだけの一方通行の場所となり、住民の意見などはなるべく言ってほしくもないという本音が表面化する。日本での公共性は、明治時代のアダム・スミスの翻訳以来、道路などの交通インフラ、公共の建築を作る公共事業に関する概念と解されており、そうした実態を土建政治、土建行政と呼び、高度成長期の日本を指して土建国家と称することも²³⁾（東島 2000: 223-257; Smith [1776] 1789: V.3, 92-107 = 1884-1888: 3(5), 77-97; 2020: 下, 340-390）。

住民参加の州議会開催日を設ける自治体も

23) 公共建築の建造に当たり、市議会と行政が主導する建築コンペが行われ、採用された設計プランが施行されることがある。市長の肝いりで住民参加の建設委員会が設置され、具体的な設計プランが作成されつつあった状況で市長が選挙に落選し、新市長の下で市議会が住民参加の案を却下して、ひとたびは採用されていたはずの建築家が「追放」された事例を、当事者として建築家の山本理顕（2015: 210-218）が語っている。この例を見ると、こうした住民参加の建設委員会が設置されることは極めてまれであり、たいいては市議会と行政が建築コンペの結果に基づいて、建築家に設計を依頼し、建物を施工会社が作るという流れが通例となっていることがわかる。その際、住民の意思が事業に反映するかどうかは、選挙で選ばれた代表である議員たちの決議を経ているという点だけで担保されており、議員たちの権限に基づいて住民の意思とは無関係に建築計画が実施されているという感想を、住民たちが抱く可能性も大きい。

22) 人種による教育、雇用機会の制限については別の説明が必要になる。

存在するアメリカでも、トランプ支持者とその敵対者というようにコミュニケーション不全の状況は生じる。結局のところ、ミードの社会性の原理により拡大する論議領域は、現実社会にはごくまれに、たとえばアメリカでのミードの社会思想をめぐるシンポジウムの場のようなところでしか、成立しないものだろう。

上記のように日本では、「公共」という言葉が利権を伴う土木建築事業に関連して、ハーバース自身が言う構造変容のためでもなく、最初から人権擁護という観点とは無縁なところで用いられる歴史がある。日本の現状を疑似的公共圏として語る場合、本来、市民としての国民や、全世界のあらゆる人々の人権を保証し、暮らしを守るものとして存在する「公共圏」という架空の「場」を想定して、それに比しての不完全さを意識して述べている。それ自体は、英仏の革命とその後の各種の議会制民主主義の試みを通じて実現されたかに見えた公共圏が構造変容して、政治的プロパガンダにより国民を動員し、(往々にして不当な)商業的宣伝により消費者を搾取する(こともある)政治的、経済的支配者、権力者の、正統性の確認機構のようなものになった転落に関するハーバース自身の指摘をなぞる表現でもある。たとえば、「疑似的公共圏」という言葉の用例をネット検索するうちに、ハーバース自身の文言を「(疑似)公共圏」と要約して表現している研究者を発見した(鈴木 1991: 67)²⁴⁾。英訳で ‘pseudo’, 邦訳で

「疑似的」という言葉は当てられていない部分だが、辞書で確認するとそうとも訳せるという程度の言いかえとなっている。すなわち、ハーバース自身が描く構造変容によってできた19世紀末以降の世界が疑似公共圏であるのなら、公共圏という素晴らしい領域が世界のどこかに実在したかもしれないという考えを捨てれば、さらにすっきりするのではないか。すなわち為政者が憲法に従いあらゆる人の人権を守る約束をし、その状況を維持すべく公開の場所で公正で平等な議論を戦わせ、正しく世の中を導いていくような政治体制というものは、基本的には実現が難しい理念に過ぎないと素直に認めるべきだろう。そもそもフランス革命は、短期間のうちに指導者同士の政争でお互いをギロチンに送りあって滅亡し、イギリスの清教徒革命から名誉革命にかけての一連の経緯においても、王権を廃止して王を処刑したオリヴァー・クロムウェルが独裁者として君臨したあと死を迎え、王政復古して亡命していた王が権力を回復した際には、クロムウェルの遺骸は掘りかえされて首をさらされ、王の処刑に関与した人たち (regicides) はまとめて処刑された。こうした血みどろの権力抗争の世界は、公正で平等な公共圏における公開された政治的論議が可能な世界とはかけ離れたものだろう。要するに理想的な公共圏は、議会制民主主義を導く理念として一度として実現されたことはないながらも、その不在状態のままで社会のあるべき姿を示し、重要な影響を与えてきたと考えられる。実現されず、実在ではない理念として、カントが語った超越的な存在と同列に公共圏を置きなおすことで、逆に、現実そのものを少しでも改善していくための社会運動の尺度や指針が得られるのではないだ

の公共性にすぎない」([1962] 1990: 227)。

24) 文脈的には「構造変容」後、マス・メディアが標榜する公共性についての部分。鈴木の参照箇所近くに、「疑似公共圏」に当たる文言がある。各版の表現を並べてみる。(原書) ‘Die durch massenmedien erzeugte Welt ist Öffentlichkeit nur noch den Schein nach’ (Habermas 1962: 205-206) = (英訳) ‘The world fashioned by the mass media is a public sphere in appearance only’ (1992: 171) = (邦訳) 「マス・メディアが作り出した世界はもう見かけの上

ろうか。

こうしてハバーマス自身も自らを養っただろうドイツ観念論本来の磁場へ、公共圏概念を送りかえすことで、ミードのドイツ観念論的な普遍志向から発して現代に引きつぐ遺産のようなものとして、公共圏概念に本来の位置を与えられるのではないか。

まとめ

ミードが構成した論議領域概念は認識可能な世界全体までいきわたりうる合理的な科学的議論の世界として拡大され、普遍化されるものとして語られていた。ミードの遺稿集の編纂にも携わり、その思想の全貌を把握しうる立場にいた哲学者のデヴィッド・ミラーとの往復書簡で、ブルーマーはその晩年、分断した社会にあっても統合した視点としての「一般化された他者」の役割取得がいかに可能になるのかを尋ねた。哲学的議論としては、相互作用や対話のなかで複数の人物が交流して意見を交換するうちに、お互いのパースペクティブが共有されて融合し、共通の意味や価値観を使いこなすことで合理的に議論が深まっていく社会性の原理を参照しつつ、それに依拠した合理的な社会改革の可能性が語られる。しかし現実社会において、そうした合理的な議論の深まりは画に描いた餅ではない。合理的判断は目の前の経済的利得により先おくりされ、敵対した人たちは何らかの事情で手を結ばざるをえなくなるまで、最初に敵対しはじめた理由を忘れてまで敵対をつづけるかもしれない。

論議領域は複数形の論議（諸）領域（群）として複数が並立、重複しあって存在するのが常態だが、そうして消長を繰り返し、合体しては分裂する人々の集団を記述するために、やがて社会的（諸）世界（群）という言葉が、初期シカゴ学派社会学以降の学術用語

となっていった。

そして英仏の革命で王政が倒れるか質的な変化を被り、議会民主制の世の中となるが、その際、あらゆる人の権利を平等に認める人権思想が、最高法規たる憲法を通じて擁護される。そうした社会体制が世界標準になろうとしているかに見える時代が、到来する。平等で公平な社会関係を結ぶ人々が、公開の理性的な討論の場で、権力によって課せられる制約なしに自由に、自らの責任で議論を交わす公共圏は、そうした社会的（諸）世界（群）の特殊なあらわれだが、真正の公共圏は現実の政治経済仮定のなかで一度も成立したことがない理念にすぎず、現実には公共圏を標榜して営まれる（日本社会のような）体制も、実質的には欠陥だらけの疑似公共圏に過ぎないと本論では考えた。その結果、包括的な疑似公共圏のなかで、無数に営まれる社会的（諸）世界（群）としての公共（諸）圏（群）が、それぞれのアプローチで公正な社会を旨として何らかの活動や主張を繰り返りひろげることになるだろう。こうしたすべての過程は、SIの枠組により記述、分析できる。

参考文献

- Becker, Howard S., Blanche Geer, Everett C. Hughes and Anselm Strauss, [1961] 1977, *Boys in White: Student Culture in Medical School*, New Brunswick, N.J.: Transaction.
- Best, Joel, 2006, "Blumer's Dilemma: The Critic as a Tragic Figure," *American Sociologist*, 37 (3): 5-14.
- Blumer, Herbert, 1937, "Social Psychology," Emerson P. Schmidt, ed., 1937, *Man and Society: A Substantive Introduction to the Social Sciences*, New York: Prentice-Hall, 144-98.
- [1939] 1979. *Critiques of Research in the Social Sciences: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America"*. New Brunswick, N.J.: Transaction.
- 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective*

- and Method*, Berkeley: University of California Press. (=1991, 後藤将之訳, 『シンボリック相互作用論——パースペクティブと方法』 勁草書房.)
- (ed., intro., Thomas J. Morrione) 2004, *George Herbert Mead and Human Conduct*, Walnut Creek, CA: Altamira.
- Boole, George, [1854] 1958, *An Investigation of the Laws of Thought on Which Are Founded the Mathematical Theories of Logic and Probabilities*, reprinted with corrections, New York: Dover.
- Brewster, Bradley H. and Antony J. Puddephatt, 2016, “George Herbert Mead as a Socio-Environmental Thinker,” *Joas & Huebner* 2016: 144-164.
- Burke, F. Thomas and Krzysztof Piotr Skowroński (eds.), 2013, *George Herbert Mead in the Twenty-first Century*, Lanham: Lexington.
- Calhoun, Craig, ed., 1992, *Habermas and the Public Sphere*, Cambridge, Mass.: MIT Press. (= 1999, 山本啓・新田滋訳, 『ハバースと公共圏』 未来社.)
- Cefai, Daniel, 2015, “Social Worlds: The Legacy of Mead’s Social Ecology in Chicago Sociology,” *Joas & Huebner* 2016: 165-184.
- Cooley, Charles Horton, 1909, *Social Organization: A Study of the Larger Mind*, New York: Charles Scribner’s Sons. (= 1970, 大橋幸・菊池美代志訳, 『社会組織論』 青木書店.)
- Cressey, Paul G., [1932] 1969, *The Taxi-Dance Hall: A Sociological Study in Commercialized Recreation and City Life*, Patterson Smith. (= 2017, 桑原司・石沢真貴・寺岡伸悟・高橋早苗・奥田憲昭・和泉浩訳, 『タクシーダンス・ホール——商業的娯楽と都市生活に関する社会学的研究』 ハーベスト社.)
- Dewey, John, [1926] 1929, *Experience and Nature*, London: George Allen & Unwin. (= 2017, 河村望訳, 『デュイ = ミード著作集 4 経験と自然』 人間の科学新社.)
- Duneier, Mitchell, 2016, *Ghetto: The Invention of a Place, the History of an Idea*, New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Einstein, Albert, 1905, “Zur Elektrodynamik bewegter Körper,” *Annalen der Physik*, 322 (10): 891-921. (= 2015, 内山龍雄訳, 『相対性理論』 岩波書店.)
- Faris, Ellsworth, 1932, “The Primary Group: Essence and Accident,” *American Journal of Sociology*, 38: 41-50.
- [1937] 1969, *The Nature of Human Nature, and Other Essays in Social Psychology*, New York: Books for Liberty Press (McGraw-Hill).
- Franks, David D., 2010, *Neurosociology: The Nexus Between Neuroscience and Social Psychology*, New York: Springer.
- Fraser, Nancy, 1992, “Rethinking the Public Sphere: Models and Boundaries,” *Calhoun* 1992: 109-142. (= 1999, 「公共圏の再考：既存の民主主義の批判のために」, 117-145.)
- Habermas, Jürgen, [1962] 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied (Luchterhand), Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1992, Trans., Thomas Burger, *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*, Cambridge, UK: Polity.) (= [1973] 1994, 細谷貞雄・山田正行訳, 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』 第2版, 未来社.)
- Hamilton, Peter (ed.), 1992, *George Herbert Mead: Critical Assessments*, V.1-4, London: Routledge.
- 宝月誠, 2021, 『シカゴ学派社会学の可能性——社会的世界論の視点と方法』 東信堂.
- 宝月誠・中野正大編, 1997, 『シカゴ社会学の研究——初期モノグラフを読む』 恒星社厚生閣.
- Huebner, Daniel R., 2014, *Becoming Mead: The Social Process of Academic Knowledge*, Chicago: University of Chicago Press.
- Hughes, Everett C. (ed., intro., David Riesman, Howard S. Becker), [1971] 1984, *The Sociological Eye: Selected Papers*, New Brunswick: Transaction.
- 井上達夫, 2003, 『法という企て』 東京大学出版会.
- 井上達夫編, 2006, 『公共性の法哲学』 ナカニシヤ出版.
- Joas, Hans and Daniel R. Huebner, eds., 2016, *The Timeliness of George Herbert Mead*, Chicago: University of Chicago Press.
- 鎌田大資, 2014 「市民社会をもたらす公共圏と社会的世界としての公共圏——社会学研究の礎石としてのハバースとシンボリック・インタラクショニズムの融合」 『現代社会学部紀要』 8 (1): 19-45. (中京大学)

- 2019, 「20世紀社会学と社会調査の発生史——社会的世界論をもちいた初期シカゴ学派社会学研究要約と図解」『椋山女学園大学研究論集』（社会科学篇）50: 79-96.
- 2020, 「ある精神障がい者患者会に関する調査行為の終結に向けて——序論としての補遺」『椋山女学園大学研究論集』（社会科学篇）51: 143-158.
- 2021, 「ジョージ・H・ミードの社会的自己論とドイツ観念論哲学——初期シカゴ学派社会学の忘れられた一側面をめぐって」『椋山女学園大学研究論集』（社会科学篇）52: 15-28.
- 2022, 「ジョージ・H・ミードの「論議領域」概念のシンボリック・インターラクシオニズムへの接合を再考する——普遍志向が文化多元主義へと移行するとき」『椋山女学園大学研究論集』（社会科学篇）53: 33-50.
- 2022a, 「日本人社会学者でもsymbolic interactionist ethnographyを手がけられるか——社会的世界論を活用した社会現象の分析例」『人間関係学研究』20: 27-43. (椋山女学園大学)
- Kant, Immanuel, 1784, “Beantwortung der Frage: Was Ist Aufklärung,” (https://de.wikisource.org/wiki/Beantwortung_der_Frage:_Was_ist_Aufkl%C3%A4rung%3F, 2023年5月9日閲覧.) (=2006, 中山玄訳, 「啓蒙とは何か」, 『永遠平和のために／啓蒙とは何か』光文社, 9-29.
- Kuhn, Thomas, [1962] 1996, *The Structure of Scientific Revolutions*, University of Chicago Press. (=1971, 中山茂訳, 『科学革命の構造』みすず書房)
- Kurtz, Lester R., 1984, *Evaluating Chicago Sociology: A Guide to the Literature, with an Annotated Bibliography*, Chicago: University of Chicago Press.
- Luther, Martin, 1520, “Von der Freiheit eines Christenmenschen,” 1962, *An den christlichen Adel deutscher Nation; Von der Freiheit eines Christenmenschen; Sendbrief vom Dolmetschen*, Stuttgart: Philipp Reclam jun. GmbH & Co., 110-150. (= 2011, 徳善良和訳, 『キリスト者の自由——一訳と注解』教文館.)
- Mead, George Herbert, 1929, “Bishop Berkeley and His Message,” *Journal of Philosophy*, 16: 421-430. (=2021, 鎌田大資・桑原司訳, 「パークリー司教とそのメッセージ」『経済学論集』97: 1-15. 鹿児島大学)
- (ed., Arthur E. Murphy), 1932, *The Philosophy of the Present*, London: Open Court. (=2001, 河村望訳, 「現在の哲学」『デューイ=ミード著作集14現在の哲学・過去の本性』人間の科学新社, 9-162.)
- (ed., intro., Charles W. Morris, Daniel R. Huebner and Hans Joas) [1934] 2015, *Mind, Self, and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist: Definitive Edition*, Chicago: University of Chicago Press. (=2018, 植木豊編訳, 「『精神・自我・社会』」『G・H・ミード著作集成』作品社, 197-602)
- (ed., intro., Charles W. Morris, In Collaboration with John M. Brewster, Albert M. Dunham, and David L. Miller) 1938, *The Philosophy of the Act*, Chicago: University of Chicago Press.
- (ed., intro., Mary Jo Deegan) 2001, *Essays in Social Psychology*, New Brunswick, New Jersey: Transaction.
- (ed., intro., Gert Biesta and Daniel Tröhler) [2008] 2016, *The Philosophy of Education*, New York: Routledge
- Merton, Robert K., 1968, *Social Theory and Social Structure*, enlarged ed., New York: Free Press. (= 1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳, 『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- Miller, David, 1973, *George Herbert Mead: Self, Language, and the World*, Austin: University of Texas Press.
- Myrdal, Gunnar, 1944, *An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy*, New York: Harper & Brothers.
- 中野正大・宝月誠編, 2003, 『シカゴ学派の社会学』世界思想社.
- OED (*Oxford English Dictionary*), 2002, 2nd Ed. CD-ROM Version 3.0. Oxford: Oxford University Press.
- Park, Robert Ezra, 1915, “The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the City Environment,” *American Journal of Sociology*, 20: 577-612.
- 1922, *The Immigrant Press and Its Control*, New York: Harper & Brothers.
- Park, Robert E. and Ernest W. Burgess, [1921] 1924, *Introduction to the Science of Sociology*, 2nd ed.,

- Chicago: University of Chicago Press.
- Perkin, Harold, 1989, *The Rise of Professional Society: England*
- Roy, Donald, 1952, "Restriction of Output by Machine Operators in a Piecework Machine Shop: A Preliminary Analysis," PhD dissertation., Department of Sociology, University of Chicago.
- Schudson, Michael, 1992, "Was There Ever a Public Sphere?" *Calhoun 1992*: 143-163. (= 1999, 「かつて公共圏は存在したのか? 存在したとすればいつなのか? アメリカの事例からの考察」, 160-189.)
- Shibutani, Tamotsu, 1955, "Reference Groups as Perspective," *American Journal of Sociology*, 60: 562-569.
- 1962, "Reference Groups and Social Processes," A. Rose, ed., *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Boston: Houghton Mifflin, 128-147.
- Short, James F., Jr. (ed., intro.), 1971, *The Social Fabric of the Metropolis: Contributions of the Chicago School of Urban Sociology*, Chicago: University of Chicago Press.
- Smith, Adam, [1776] 1789, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 5th ed., V.1-3, London: A. Strahan and T. Cadell. (= 1884-1888, 亜当斯密 (アダム・スミス) 著, 石川暎作・瑳峨正作訳, 『富国論』 3巻, 経済学講習会; 2020, 高哲男訳, 『国富論』 上, 下, 講談社)
- Smith, T.V., 1931, "The Social Philosophy of George Herbert Mead." *American Journal of Sociology*, 37: 368-385.
- 1932, "George Herbert Mead and the Philosophy of Philanthropy." *Social Service Review*, 6: 37-54.
- 1932a, "The Religious Bearings of a Secular Mind: George Herbert Mead." *Journal of Religion*, 12: 200-213.
- Stone, Gregory, 1959, "Clothing and Social Relations: A Study of Appearance in the Context of Community Life," PhD dissertation., Department of Sociology, University of Chicago.
- Strauss, Anselm L., 1978, "A Social World Perspective," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.1, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 119-128.
- 鈴木玉緒, 1991, 「公共圏とコミュニケーション的行為——アーレントとハーバース」『社会分析』 19: 59-75. (日本社会分析学会)
- 高橋道子, 2010, 「擬似公共性からコミュニケーション的行為へ——町内会の一事例にみる可能性」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』 10: 23-43. (北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院)
- Thomas, William Isaac and Florian Znaniecki, [1918-1920] 1974, *The Polish Peasant in Europe and America*, V. 1, 2, New York: Octagon Books.
- 東島誠, 2000, 『公共圏の歴史的創造——江湖の思想へ』 東京大学出版会.
- Uyeki, Eugene S., 1953, "Process and Patterns of Nisei Adjustment to Chicago," PhD dissertation., Department of Sociology, University of Chicago.
- Winkin, Yves, 1988, *Les moments et leurs hommes*, Paris: Seuil/Minuit. (= 1999, 石黒毅訳, 『アーヴィング・ゴッフマン』 せりか書房.)
- Wiseman, Frederick (監督, 製作, 編集), 1999, *Belfast, Maine*. 『メイン州ベルファスト』²⁵⁾
- 2006, *State Legislature*. 『州議会』
- 2020, *City Hall*. 『ボストン市庁舎』
- Woods, David W., 2013, "George Herbert Mead on the Social Bases of Democracy," *Burke & Skowronski*, 2013: 203-214.
- 山本理顕, 2015, 『権力の空間／空間の権力——個人と国家の〈あいだ〉を設計せよ』 講談社.
- Zorbaugh, Harvey Warren, [1929] 1976, *The Gold Coast and the Slum: A Sociological Study of Chicago's Near North Side*, Chicago: University of Chicago Press. (= 1997, 吉原直樹・桑原司・奥田憲昭・高橋早苗訳, 『ゴールド・コーストとスラム』 ハーベスト社.)

25) ワイズマンの映画作品の出典は, 作者, (アメリカでの) 公開年, 原題 (イタリック). 『邦題』. で示した。製作はすべてZipporah Films.